

2018年度の「pp奨学金」受給生が決まりました

2017年度に日本人(元外国籍を含む)を対象とした返還義務のない「pp奨学金(パチンコ・パチスロ奨学金)」が発足し、今年で2年目を迎えました。今年は総勢49名の応募者のうち、高等専門学校生、専門学校生、大学生、大学院生の合計22名が選ばれました。調理師を目指す学生や、看護師、医師、また、体育教員をめざす学生など様々な夢と希望を胸に抱いています。

経済的な理由から進学を諦めたり、成績優秀にもかかわらず家庭の状況から途中で進学を諦めたりしてしまうことのないよう、学び続けたいという切実な思い、夢の実現を目指す学生の思いをサポートしてまいりたいと思います。



式典では、一人一人の自己紹介の時間も設けられました。終わってホッとした様子の給付生13名。

いつもお振り込みありがとうございます。
お振り込みいただく度に、私の努力や研究に期待してくださる方々の存在を改めて確認することが出来ます。ゆえに、日々折れそうになっても「あと少し」と踏ん張れるのが奨学金のありがたみです。これからもいろいろと面倒をおかけいたしますが、よくお願い申し上げます。

奨学金を渡すだけでなく、日ごろの生活や学業についてハガキでもやりとりをしています。メッセージを寄せてくれたのは、立教大学21世紀社会デザイン研究科 博士課程4年生。

8月 夏期研修会

今年で52回目を迎えます。今回は、現役社会人のOBOGに協力してもらい、「外国につながるをもつ私たちのルーツ」について、先輩からの

話を聞き、皆で語らう機会を設けたいと思います。

10月 グローバルフェスタ

今年もお台場で行われる予定です。さぼうとは、展示と飲食ブースをそれぞれ出展予定で、飲食ブースでは毎年大人気のモヒンガーを販売予定です!お近くまでいらしたらぜひ!

8月 夏休み集中学習支援教室

一般財団法人柳井正財団、明治学院大学「内なる国際化プロジェクト」のご協力を得て実施します。夏休み中

の20日間、朝から夕方まで、小学生から高校生までが集い、みな勉強に励みます!

今年のイベントを紹介!
2018

11月 支援生の報告会

坪井基金の支援生による学業成果のお披露目会。7カ国、10名の学生が報告予定です。報告会の後には交流会もありますので遊びにいらしてください。
※昨年度の様子は本紙2ページ目に掲載



Newsletter

Support21 Social Welfare Foundation

Vol.65 2018.6

社会福祉法人 さぼうと21

理事長 吹浦 忠正

社会福祉法人さぼうと21は…

日本国内で生活するうえで困難をきたしている難民やその家族、定住外国人および元外国籍の人々の相談に乗り、また自立支援活動を行う社会福祉法人です。認定NPO法人難民を助ける会(AAR JAPAN)を母体に、その国内事業を受け継ぎ、厚生省(当時)認可の社会福祉法人として1992年に設立されました。「困った時はお互い様」をモットーに、日本国内で政治、宗教に中立な立場で活動しています。学業継続のための経済支援を中心に、生活困窮者に対する幅広い生活支援を実施しております。

私たちの活動を応援して下さる方を求めています!

- 会 員：法人会費50,000円/個人会費5,000円
- ご寄付：随時受付
- マンスリーサポーター：随時受付

会費・ご寄付とも税法上の優遇措置が受けられます

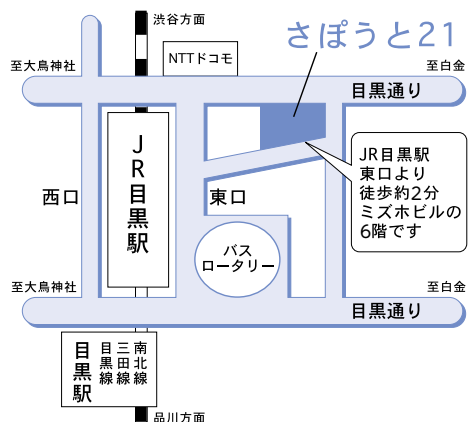
◆会費・寄付のご送金口座◆

ゆうちょ銀行	振替口座：00180-7-25470 加入者名：社会福祉法人 さぼうと21 ※通信欄に会費または寄付とご明記ください
三井住友銀行	目黒支店(普) 851872 名義：社会福祉法人 さぼうとにじゅういち
みずほ銀行	目黒支店(普) 1180279 名義：社会福祉法人 さぼうとにじゅういち ※銀行振込み後は事務局までご一報ください

お問い合わせ

社会福祉法人 さぼうと21

住所：〒141-0021 東京都品川区上大崎2-12-2ミズホビル6階
TEL：03-5449-1331 FAX：03-5449-1332
E-mail：info@support21.or.jp URL：http://www.support21.or.jp



Support 21



Vol.65 2018.6

Newsletter

卒業を控えて 兵庫県立大学 経済学部 ルアン チイさん (2012年度から支援生)

人が苦手だった子ども時代

私のルーツはベトナムで、両親が戦火を逃れて日本に渡ってから私が生まれました。国籍はベトナムですが、日本の学校教育を受けて育ったので中身は日本人に近いです。小中学生時代は人と話すのが苦手で内向的なタイプでした。部活動(吹奏楽)の場でもなかなかメンバーとコミュニケーションを取ることができずに苦勞した覚えがあります。高校時代はそんな性格が少し直り、受験勉強の末に今の大学に進学できました。

目標をもつことを学んだ弓道部



大学生活は高校までと違いクラスがないので、部活動やサークルに所属しなければ自分の居場所が確保できません。そこで、友人に誘われるがまま弓道部に入部しました。そのおかげで充実した学生生活を過ごすことができた。人によって充実の定義は違いますが、私は多くの人と関わって自分自身を成長させることだと思っています。

弓道部では稽古の準備や掃除は下級生がすることになっており、その活動を通して自然と会話が生まれます。私もよく自分のことを話すようになり、周りに馴染むことができました。先輩と稽古後も一緒に話したり食事に連れて行ってもらうといった経験は、中高の部活動ではなかったので、最初は戸惑ったもののすぐに打ち解けました。以後、部のイベントで大勢が集まる場面でも、自分から積極的に話すようになりました。

また精神面でも成長できたと思います。弓道は「道」がつくだけあって一朝一夕の稽古で上手になるものではありません。私は毎日稽古に励んでも同期と比べると上達が遅かったです。そんなときに落ち込むか前向きになるかで今後の進む道が大きく変わってきます。私は一時は落ち込んだものの、すぐに気持ちを切り替えて目標をつくり、先生や先輩から多くを学び自分のものにしようという稽古に励みました。昔の私なら少しでも劣等感を持ったり失敗を指摘されたりすると自信をなくしてずっと引きずっていたでしょう。

ホテルではなく旅館の仕事を

そして今、就職活動をしています。社会人になれば休みの日より働く時間の方が長いのは確実なので、自分のやりたい仕事をすべきだと思いました。弓道部の活動を通して人と関わるのが楽しいと思えるようになったので、今後人との関わりを通して成長していきたいという答えにたどり着きました。そこで選んだのは旅館の仕事です。同じ業界にホテルがありますが、それは要望があってから動く受動的サービスであるのに対し、旅館はお迎えから見送りまで担当し自分からお客に関わっていく接客形態です。日々の仕事で自らお客様に聞いたり、心を察したりして、個人に合ったサービスを提供できるように経験を積む必要があります。それを通して自身も成長したいと強く思っています。旅館の仕事は激務ですが、意味を持って働くことで乗り越えられるはずですよ。

誰でも人生の中で自分を変える出来事がいくつかあると思いますが、私にとってはそれが弓道部の活動でした。小さなきっかけで入部しましたが、4年間稽古に力を注いだ経験や、仲間との関わりによって、就職活動を通して将来何がしたいのか明確にすることができたと考えています。

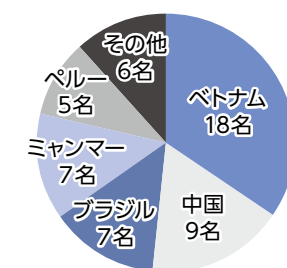
2018年度の生活支援生(52名)決定

「生活支援プログラム」と「坪井一郎・仁子学生支援プログラム」の応募者選考の結果、今年度は難民や日系定住者、中国帰国者の子弟等11カ国出身の52名への支援が決まりました。約半数が高校生で、8割以上が大学進学を希望しています。予備校に通えなくても国公立を目指して必死に勉強したり、受験で好成績を収めて大学の奨学金を得たり、高校3年間のアルバイトで入学費用を貯めるなど、それぞれに努力を重ねています。しかし学費負担が重く、当会の支援だけでは学生生活の継続が困難な状況にあります。

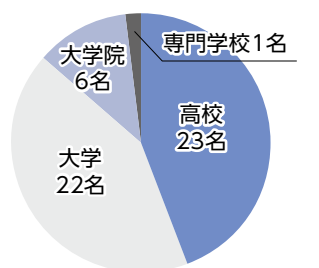
今後生活支援の内容を見直し、よりニーズの高い方々への支援を充実させたいと考えております。学生への支

援は皆様の会費・ご寄付によって成り立っております。引き続きご協力いただけましたら幸いに存じます。

支援生のルーツ



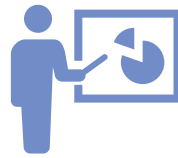
学校種別



2017年度の活動紹介

外国にルーツをもつ「研究者の卵」たち

大学3・4年生、大学院生が、学業の成果を発表しました。



「坪井一郎・仁子学生支援プログラム(坪井基金)」では、経済的に困難な中で勉強に励む、日本育ちの、外国につながるのある学生を応援しています。本年度は、5カ国・11名が支援を受け、2月にポスターを使った発表会を行いました。見た目は「外国人」なのに、流ちょうな日本語で、聞き手に分かりやすく話す様子に、ご来場者との交流も進みました。



宇宙初期の高温・高密度物質Quark Gluon Plasma(QGP)の性質

スイスのCERN研究所(素粒子物理学と初期宇宙の物理学を扱う研究機関)で実験に参加し、成果を、お手製の紙芝居を使いながら発表。



「日・中・韓」の歴史認識

日系ブラジル人という立場で、大学のゼミのメンバーと一緒に、学内の日本人学生・留学生に調査を行った。より深い異文化交流のために、歴史を多面的に捉える必要がある。



難民について語るより、難民と語ろう

「難民」も一人の人間で、高い能力や、多くの可能性を秘めている。先進国の大半は難民を拒否する傾向にあるが、私は、難民こそが、より良い世界のために欠かせない存在ではないかと考える。

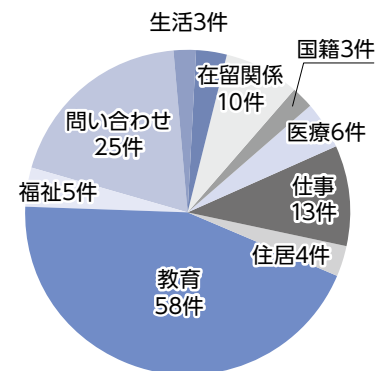
ご来場者の声

- 日本社会が考えていかなければならない問題がたくさん提示されていました。
- 難しい物理の話の小説に例えてからプレゼンしてくれたのが、聞きやすく良かったです。
- 手話を画像認識する技術の仕組みと可能性を感じました。
- 日本の医療の問題点と、社会的選択理論の適用可能性について示唆を受けました。

2017年度に受けた相談

日本で生活する中で困ったことや、相談したいことがあった時に、話を聞き、一緒に考えています。

外国の方や、ご友人の日本人の方、難民問題に関心のある学生などから、様々な相談が寄せられます。必ずしも解決につながらないことや、本人の意思にそぐわない結果になることもありますが、「何かあった時」に、気軽に相談できる場所であるよう、いつも心がけています。



今週中に入学金を払わないといけない・・・

指定校や公募推薦、AO入試など、日本の大学入試制度も多様化しています。学齢期の途中で来日した学生には、進学のお機も増えますが、一方で、推薦入試やAO入試は支払いが早く、学生やその親から費用の工面について相談があります。受験手引きに書かれていることが分からず、行政や福祉機関に相談する時期を逸してしまう方も少なくありません。(事務局スタッフ)

母語で診断結果を聞くことができれば・・・

病気に関する相談も増えてきており、「日本語が分からないので、自分だけで行くのは不安。一緒に来てもらえないか」と病院同行のお願いをされることがあります。私たちが病院同行をする際には、通訳としてではなく付き添いとしてお医者様のお話を一緒に聞きます。お医者様が話してくださることを、必要に応じて、通訳を介して後からご本人に説明したり、あるいはやさしい日本語で伝えたりしています。病院によって医療通訳者が配備されていたり、他機関からの派遣をお願いできたり、そういったサービスはなかったりと環境も様々です。たとえ通訳のサービスがあっても、難民等の定住外国人の中には、通訳者の限られる言語を母語とする方も多く、通訳者がうまく見つからないことも考えられます。心身ともに不安な状況に置かれる病気の時こそ、母語で説明を聞き、きちんと理解した上で治療に臨みたいものです。これからも更なる整備が期待される分野だと感じています。(事務局スタッフ)

性別	女性：61名 / 男性：56名
国籍	23カ国1地域

学習支援室、2017年度も皆さまに支えられて

支援者を支援する

ここ数年、文化庁事業を受託し、「日本語教育」「人材育成」「教材作成」の3本柱を「さぼうと」らしく展開してきました。平成29年度は、とくに「人材育成」について大きな成果が見られた年でした。初めての試みであった「活動基礎講座」も各分野の専門家の力をお借りし、初めてとは思えない充実した内容で、参加者の評価も非常に高いものでした。

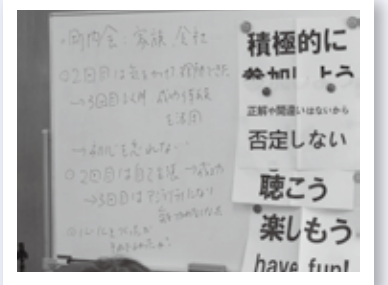
参加者Aさん：語学だけでなく、学習者の生活者としての立場に立って理解をする一助になると感じました。語学ボランティアとしてだけでなく、生活者ボランティアとして、学習者の方に寄り添って活動をしていきたいと思っています。

参加者Bさん：「在留資格」「相談窓口」など、普段

平成29年度文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 地域日本語教育実践プログラムA

気にはなりつつ調べることもせずにいた身にとって、Best Topicでした。

講座終了後に、実際に活動を始められた方もいらっしゃいます。さぼうと21という「地域に根差さない」団体だからこそ、「地域に縛られず」「地域を越えて」、ボランティアの方々のネットワークを形成していくお手伝いができるのかもしれないと感じています。



「異文化を理解するとは？」のワークからの気づき

支援者が学ぶ

平成29年度東京都在住外国人支援事業

「難民等定住外国人住民と日本人住民が共に学び、成長する「学習支援室」充実化事業」では、学習支援室の質の向上、教育相談対応の充実化を目指し、「支援者」であるスタッフ、ボランティアが学ぶ機会をいただくことができました。ボランティア勉強会として「学齢超過生徒への学習支援を学ぶ」「夜間中学校における学習支援を学ぶ」、スタッフ勉強会として「発達障がい子どもたちへの支援」「外国人住民への相談援助」を実施しました。現場をおもちの講師の方々のお話は、どれも非常に興味深く、日頃の活動に直結する内容でした。参加者からの質疑応答も実に活発に行われました。

スタッフA：日頃、仕事に追われ、ゆっくり深く考えることをおろそかにしてしまいがちです。今回の勉強会に参加し、その内容もさることながら、それぞれの現場で困難を感じながらもプロフェッショナルとして課題解決に取り組む講師の方々のお姿に触発されました。自身の日々の活動もそうありたいと強く思いました。



「なるほど」の連続...「発達障がいの子ども達への支援」勉強会で

企業が「良き企業市民」を支援する

IBMコミュニティ гранツ

平成29年度も、IBMのコミュニティ гранツにより、学習支援室の学習環境整備が進みました。いただいた助成金で学習者記録のファイルの置き場所も確保されました。土曜日には人であふれ、思うように身動きとることもできない学習支援のスペースですが、きちんとモノの置き場所が定まっただけで、かなり活動の効率がアップしたようです。例えば、記録用のビデオカメラから子ども達の本棚、テーブルまで、全てIBMのコミュニティ гранツで購入

させていただいたものです。それらを目にするたびに、「社員が「良き企業市民」として取り組むボランティア活動を支援する」という企業の凛とした姿勢を実感します。



「錦糸町の教室でもキャスターが大活躍！」